

まとめ

1. 質疑応答と総合討論

個々の講演後の質疑応答では、Argo や補正された XBT など、近年になって大量に採取されるようになった高品質の海洋データがデータ同化を通じて数値シミュレーションに与える影響などについて議論が交わされた。MISMO で直接捉えられた MJ 振動と、MISMO の観測期間に対応する場で初期化された NICAM が再現した MJ 振動の類似も印象的であり、海洋観測と数値シミュレーションの連携の有効性が改めて浮き彫りになった。北極海の海水減少の報告に対しては特に反響が大きく、物理的メカニズムの詳細や、データの少ない過去の海水量推定などについて、

多くの質問が寄せられた。

白熱した質疑応答に押される形で、総合討論は20分ほどの短いものになってしまったが、有意義なコメントが多数寄せられた。Argo の出現以降も船舶観測の重要性は変わらず、特にフロント構造の解明など、プロセス志向で高い計画性を要求されるテーマでは依然として現場に出向いた観測が不可欠であること、また今後は Argo 観測網の維持やデータの品質管理といった、決して派手さはないが必要不可欠な活動をどのように研究コミュニティが支えていくかが課題になってくると、などの意見が出された。また、掛け声倒れに終わることもある「観測とモデルの連携」が

MISMO と NICAM の場合には有効に機能した秘訣については、具体的な比較対象を持つことが肝要であるという指摘があった。

2. おわりに

シンポジウム前日には季節はずれの台風の襲来も懸念された。実際には直撃はまぬかれたものの通勤時間帯までは大雨に見舞われ、当日の大会スケジュールをすべて15分遅らせるという混乱の中でのシンポジウム

開催となった。しかし午後には雨もあがり、シンポジウム会場は2階席まで聴衆で溢れる盛況であった。

今回のシンポジウムでは、大気科学研究者と海洋科学研究者、あるいは観測とモデリングの間の「連携」がキーワードの一つになっていたように思う。普段の研究では海洋に目を向ける機会があまりない会員も少なくないであろうが、本シンポジウムが関心の幅を広げる契機になり、そうした「連携」につながっていくことになれば幸いである。